ARCADIA

46
AUTUMN 2010

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
［アルカディア］

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM

岡崎市美術博物館

桃の花咲く
隠れ里の物語

館長　芳賀徹

「桃源郷の世界」展のための序曲
第四章　洞窟の光にじむ闇

漁師は桃花の林にふちどられた谷川を、好奇心に駆られるままに、どれほどさかのぼって行ったのでしょう。谷川とは言っても、日本の山奥の渓流のように、激しい水が岩を噛んで流れ去るというような光景ではないのでしょう。もう少し川幅も広く、漁師の漕ぐ櫓の音がゆるやかな水の音とひびきあうのが聞こえているだけ、という白昼夢のような時間を思い浮かべるほうがよいと思います。あたたかな春の日ざしが水面にきらめき、両岸の桃花の林の花びらはあるかないかの風に吹かれてとめどもなく谷川に散って流れていたのでしょう。

桃花の林は谷川の源流にまでつづいていました。漁師はいつのまにか、水の湧く淵のようなところか、山腹を滝が流れ落ちているようなところまで漕ぎのぼっていたのです。陶淵明の原作には

林は水の源に尽き、
便ち一山を得たり

とあります。「便ち」とは「すぐに」とか「すぐそこに」とかの意味で、はなはだ効果的な副詞です。漁師はここまで一生懸命舟を漕いで来て、ふと眼を上げると眼の前に山が一つ控えていた、というのですね。しかもこの山が彼の不思議への冒険の終点、行きどまりを意味するものではありませんでした。山にはさらにも彼の好奇心をうながしてやまない仕掛けがありました。

山に小さき口あり、
髣髴として光あるが若し

眼の前に立ちはだかった山を見上げると、その中腹というよりは根もとのあたりに小さな洞穴の口があったというのですね。多分この山も林におおわれた山ではなくて、岩肌がむきだしの岩山だったのでしょう。だから漁師はすぐにそこに洞口があることに気がつき、洞のなかをのぞきこんでみずにはいられなかったのでしょう。のぞきこんでみると―「かすかに日の光あるやと見ゆ」（狩野直喜現代語訳）とは、なんとみごとな、心をそそってやまぬ表現でしょう。これでは当の主人公の漁師ばかりか、現代の読者たる私たちまでも強く想像力を触発されずにはいません。

陶淵明前後の六朝志怪と呼ばれる他の不思議の説話集、『述異記』や『搜神後記』や『幽明録』にも、よく石洞や大穴や洞門や谷川の話は出てきます。ここでは詳細に立ち入らないことにしますが、それらの志怪小説では大概の場合、洞窟は単なる事件の一舞台、ないしは主人公の経由の一地点にすぎません。

ところがこの陶淵明の「桃花源記」では、洞穴の中は「うっすらと光を宿しているかに見える」と言われて、一挙にそれ自体心理的そして詩的な価値をもつ空間となりました。さきの「落英繽紛」などとともに「髣髴若有光」というみごとな措辞は、この淵明の一篇を、現代フランスの夢想の哲学者、ガストン・バシュラールの呼んでいう「大いなる夢を宿したテキスト」としてしまったのです。

暗い光を満たした洞窟といえば、古今東西いつどこの人の心にも、「なかへ入りたい欲求」と「なかへ入ることの恐怖」、好奇と恐怖の両面の心理を喚びおこさずにはいないで

しょう。そしてここでは、「髣髴」という形容句のおかげで、ただ眞暗な闇を詰めこんだものではなく、向う側が筒抜けに見える小公園のトンネルのようなものでもなくて、なにか性愛的なものさえ予感させて暗くひそかに息づいている洞穴の映像となり、ついに「なかへ入りたい欲求」のほうを勝たせてしまうのです。フロイトのリビドー説（抑圧された性的衝動の働きを中核とする精神分析学）が説かれる千五百年前、陶淵明はすでに人間の意識下の領域の作用を自覚し、把握していたとさえ言えるのかもしれません。

われらの漁師は、この洞窟をのぞいてみて、当然のごとく谷川の源流の岸に舟を舫い、さっそく穴のなかに入ってゆかずにはいられませんでした。

便ち船を舎てて口より入る。
初めは極めて狭く、
纔かに人を通ずるのみ。
復た行くこと数十歩、
豁然として開朗す。

「豁然開朗」とはまたもみごとな表現ですね。昔、狩野直喜博士はこれを「胸すくばかりにひろびろと打開きたる処へ出でつ」と和訳してみせました。まさにそのとおりです。洞窟に入りこんでみて、最初のうちは人一人が抜けられるぐらいの狭いところを、身をよじらせながら進んでいった。洞のなかが狭く窮屈だったというだけでなく、いくら「髣髴として光あるがごとし」とはいっても、不安で胸が締めつけられるような思いで手探りでくぐって行ったのですね。それでもやっぱり（「復た」）、かすかな光に誘われ、勇気と好奇心をもって数十歩―数十歩というからかなり長く暗いくねり道です―進んでゆくと、にわかに眼の前がぱっと明るくなり、ひろびろとした眺望の前におどり出たのでした。身を縮め、息をつまらせ、心をおのかせてくぐってきた暗闇の不安から、いま心理的にも一挙に解放されたのです。彼が出たところは、多分、あの岩山の反対側の中腹のあたりで、漁師の眼下には、いままで見たことも聞いたこともない桃の花咲く村里の明るい平和な光景がひろがっていたのです。

もし私がここまでの武陵の漁師の冒険の物語を大きな絵本に仕立ててみるならば（もちろん右から開く縦書きの絵本）、見開き六ページくらいは、谷川の両岸に桃の花が咲きほこる光景に漁師が驚き呆れているさまを描き、やがて漁師の姿も消えて見開き両ページを一面に薄紅と濃紅の桃の花のおもかげで埋めつくすでしょう。そのあとに、ふたたび漁師が舟を漕いで桃の花びらの流れる谷川をさかのぼる春昼の景を見開き二ページ。その次が、立ちはだかる岩山の根かたに洞口が見え、漁師が自分の舟を岸辺につないでいるところ。

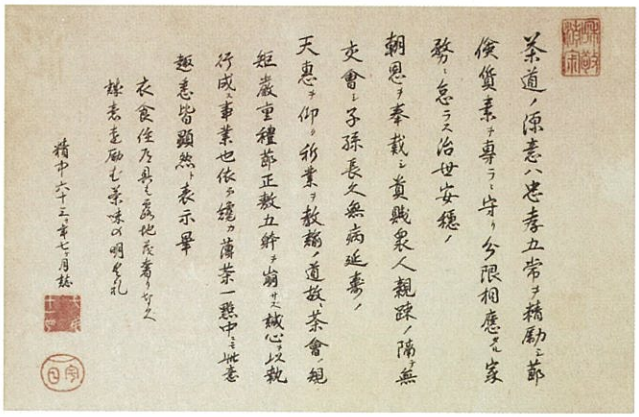
そして洞の景はこれも見開きで全六ページでしょうか。最初は入口からの光も入って、ほの白く胡粉をにじませた墨の闇、そのなかに漁師の身をよじらせる姿が浮かぶ。次の見開きは、全ページがほとんど眞黒な墨で埋められ、かすかにかすかに漁師のシルエットだけが一段と濃く読みとれる。そして最後の見開きは、右の方から左手に向かってしだいに光の量が増し、左側のページの左端のにだけ明るい光が溢れ、そのなかで漁師の半身が櫂を抱えたまま驚嘆のしぐさを見せている。そして脚下には桃源の村里の風景がわずかに垣間見られる、などというのはいかがでしょうか。

漁師が洞口から出て、村里の全景を眺望し、やがて村に下りて行って、村の住人たちと出会うところは、また次の号に語ることといたしましょう。

（以下、次号）

富岡鉄斎　《武陵桃源図》　1904年　京都国立博物館蔵　「桃源郷の世界」展出品予定

ESSAY



《茶道の源意》玄々斎筆 明治5年(1872) 今日庵蔵

現在、三河国奥殿藩主松平家の出身である裏千家十一代家元玄斎精中宗室(一八一〇–七七)生誕二〇〇年を記念した展覧会「茶の湯の文明開化」を開催しています。本展では近代黎明期の茶道界に数多くの功績を残した玄々斎の事績と幕末明治期の茶道の変遷をたどるとともに、玄々斎を生んだ奥殿藩松平家の歴史について紹介しています。ここでは幕末明治の激動の時代に活躍した、玄々斎と最後の奥殿藩主松平乗謨の活躍を紹介します。

玄々斎は幕末から明治における日本文化疲弊の時期に、茶道を通じてその復興に力を尽くしました。急速な西洋化を推し進め、日本の伝統文化に否定的な政策を進める明治政府に対し、明治五年に玄々斎は千家の宗匠を代表して茶道の精神と意義をまとめた「茶道の源意」と題する建白書を提出しました。この中で玄々斎は茶道が単なる遊芸などではなく、儒教を基に成立発展した精神文化であることを明確にしました。その一方で玄々斎は外国文化の流入に合わせて、椅子に腰掛けて行う立礼式の点前を考案するなど茶道の近代化を進め、新しい時代に即した裏千家発展の礎を築きました。伝統文化の保存と発展という難題に立ち向かい、その方向性を示したことこそ、玄々斎の特筆すべき功績といえましょう。

同時期に奥殿藩八代藩主となった松平乗謨(一八三九–一九一〇)は、一万六千石の小大名ながら、老中格や陸軍総裁など幕府の要職に抜擢されました。文久三年(一八六三)乗謨は前年の参勤交代制の緩和やペリー来航などの内外の情勢を踏まえて、在所(本拠地)を先祖伝来の地である三河領四千石の中心地奥殿から、信濃領一万二千石の拠点である田野口(長野県佐久市)へ移しました。また早くから洋学を学び、幕府軍にフランス式兵制を導入するなど近代化を進めていた乗謨は、田野口に函館五稜郭とともに今に残る星型の洋式城郭である新陣屋「龍岡城五稜郭」を建設し、後に藩名も龍岡藩に改めました。しかし明治維新に際しては、時局を鑑み、慶応四年に自ら老中を辞し、氏名も松平乗謨から大給恒と改め、戊辰戦争では勤皇の意を示して北越に出兵しました。廃藩後は新政府に出仕し、勲章制度の確立に努め、賞勲局総裁を務めたほか、西南戦争(一八七七)の際には博愛社(後の日本赤十字社)を設立、副総長に就任し、その発展に貢献しました。

幕末から明治への激動の時代を、的確な状況判断と柔軟かつ積極的な考え方で乗り切り、次代へと歴史を繋いだ玄々斎と大給恒。その生き方は、激しく移ろう現代を生きる私達が、時代と向き合うための一つの指針となるのではないでしょうか。

《大給恒像》明治時代前期　個人蔵

裏千家11代玄々斎宗室生誕200年記念

茶の湯の文明開化

—茶人玄々斎の生涯と奥殿藩松平家—

会期：平成22年9月11日(土)～11月7日(日)

浦野加穂子

古い家財道具を「民具」と呼んで、博物館や資料館は「生活文化財」として集めています。ガラクタ、粗大ゴミと揶揄され、何かと肩身の狭い想いをしている道具たちです。しかし、古い道具を集めて調べると、その道具に託された先人たちの知恵や工夫に新鮮な発見があるばかりでなく、昔からの暮らしのうつりかわりを知ることができるのです。

この展覧会では、岡崎市収蔵品の中から暮らしの変遷を語る生活道具のほか、マチ(町)やムラ(村)における生産・生業用具などを紹介していきます。〔衣食住を支えた身近な道具たち〕、〔ムラの暮らし〕、〔マチの暮らし〕の三テーマを設け、道具から暮らしの変遷を読み取っていただきたいのと同時に、「今」を捉え直す場面になればと考えています。

〔衣食住を支えた身近な道具たち〕では、私たちの日常生活の基本である衣・食・住にスポットを当てて、身近な暮らしの道具たちを紹介していきます。ミシン、アイロン、木製氷冷蔵庫、ちゃぶ台、箱膳、ランプ、行火(あんか)等いろいろな道具が登場します。懐かしいモノなのか、物珍しいモノなのか――どう受け止められるかは世代により、育った環境により人それぞれであることでしょう。

次に〔ムラの暮らし〕として、暮らしを支える基本としての生産・生業に関わった道具たちにスポットを当てて、当時の人々の暮らしを探っていきます。とくに平野部においては米づくり、山間地においては林業、炭焼き、茶栽培などの道具たちを取り上げます。また、現金収入として、この地域で盛んであった養蚕に関わる道具たちも紹介していきます。

そして、〔マチの暮らし〕はムラの暮らしと対比して町屋、商家で使われていた道具たちにスポットを当てて、暮らしの違いに気付いていただきたいと思います。また、職人たちの世界もマチの暮らしの中で重要な役割を持っていました。職人の使った道具からマチの暮らし、作り出される道具たちの美しさの一端を読み取っていただけると、職人の知恵と技の確かさ、高度な技術が理解できると思います。

ここに集めた道具たちは、かつては埃をかぶり片隅に追いやられ、いつかは捨てられる運命にあったものです。それらが皆さんからの寄贈によって、博物館の資料となりました。美術工芸品のように高価なものはありません。しかし、人の知恵と工夫、身近な素材、イエ(家)の歴史、郷土の暮らしを伝える身近な文化財として、「今」を語り合う資料として、後世に引き継いでいくべきものではないでしょうか。

働き終えた道具たちは、私たちに何を語るのでしょう。単に懐かしさだけでなく、長い年月をかけて人々が築き上げ、伝承してきた生活の知恵と工夫を汲み取って下さい。同時に、格段に便利になった生活を享受している私たちの「今」の暮らしや社会を捉え直す場面にしていただければと思います。

卓上ミシン(手廻し式)

大足

収蔵品展

民具が語る 暮らしのうつりかわり

伊藤久美子

会期:平成22年11月20日(土)～平成23年1月16日(日)

集荷の旅は胸に沁みて（2）

荒井信貴

先回、話題とした間島秀徳氏宅周辺は、宅地開発は未完成のままでしたが、こんもりとした山のある公園だけは整備されていました。古墳公園でした。霞ヶ浦を望む丘陵上にある富士見塚古墳と名付けられた全長七八mの立派な前方後円墳で、麓には展示施設もあるようでした。考古学専攻としては大いに興味が注がれるのですが、仕事優先、後ろ髪をひかれながらも次の目的地へと向かいました。霞ヶ浦は、今は淡水の湖ですが古墳の作られた頃は海水の内海であったことが、後に記された『常陸国風土記』から知られています。古墳は六世紀にこの地を支配していた豪族の墓で、湖と周辺の田んぼを生活の糧を得る場としていた人々の上に君臨していた人物だったと思われます。湖が舟運、漁業の舞台として重要であったことが伺われます。間島氏作品の主要テーマも水です。「落ちる」「流れる」「溜まる」と様々な瞬間に見せる水の動きを、四角や円形のパネルの上に、大理石の粒を混ぜた白い顔料を水に溶かし流し定着させています。パネルの上部から流し込み、或いはパネルを前後左右に傾けながら表現しているのです。写真の作品は「Water Works No.7」、横二・二五mもある作品です。滝の流れのような表現は間島氏のオリジナルです。混ぜられた大理石粒が、表面の微妙な凹凸、動きの軌跡を生むとともに、水面にあたる光のようなきらめきを発散させています。

Water Works No.7

COLUMN & TOPIC

博物館実習を終えて

稲垣満春

当館では、博物館学芸員資格取得のための博物館実習を毎年八月に実施しています。今年度は八月十七日(火)から二二日(土)までの期間、十三名の大学生を受け入れて実施しました。実習生たちは、館の施設管理や運営、考古資料、掛軸、巻子等の資料の取り扱い、図書の発送準備と整理、子どもと博物館、教育普及と広報活動、博物館の抱える課題などについて学びました。例年実習は、実際に博物館の現場で学芸員をはじめとした館職員の仕事を学ぶまたとない機会でもあるため、理論よりも実践を中心にした内容としています。今年度は、博物館活動の核ともいえる広報活動について実践的に取り組んでもらうためグループワークを行いました。実習生ひとりひとりが館の顔となり「私たちの考えるPR戦略」をテーマに、次回の企画展のPR戦略についてグループで話し合い発表をしていただきました。各グループからは、「ポイントカードの導入」「カップルむけにペアサービスチケットを販売」「Web広告の強化」「観覧者に対する次回展覧会チラシの積極的な配布」など集客効果のある意見をはじめ、「副館長をポスターに起用して積極的にPRする」といった思いもよらない奇抜なアイデアも出されました。この実習で初めて顔を合わせたとは思えないほど全員が打ち解け、積極的かつ真摯にグループワークに取り組んでもらえたことを、実習担当者として大変嬉しく感じました。

実習生の皆さんは、大学卒業後は就職、大学院等への進学など、進む道はそれぞれだと思います。この実習で学んだことを活かして、今後博物館の良き理解者になってもらえたらと思います。そして、この実習をともにした仲間とこれからも仲良くしてくれたらと思います。

博物館実習風景

弥次さん 喜多さんが行く

稲垣満春

藤川宿へ　— やさしいミュージアム講座「東海道を歩く」—

安城市の大浜茶屋から岡崎宿二十七曲り、西大平藩陣屋跡へと、東海道を西から東へ歩いてきたやさしいミュージアム講座も四回目。今回のコースは藤川宿です。

「弥次さん、今年の夏はこれまでにないほどの暑さだね。メタボな喜多さんもこの暑さには体が悲鳴をあげているよ。」そんな猛暑の続く九月一日、参加者一行は藤川の松並木から藤川宿東の入口にあたる東棒鼻までの約二キロを歩きました。旧東海道沿いには、今も往時を偲ばせる松並木が随所に残されていますが、藤川の松並木は市の文化財として指定され保護されています。一キロほど続く松並木を歩き、名鉄の踏み切りを渡ったところで吉良道と合流し、藤川宿西の入口にあたる西棒鼻へ。そのすぐ西側の十王堂境内には「ここも三河むらさき麦のかきつばた」と詠んだ芭蕉の句碑があります。因みに、このむらさき麦、地元のまちづくり保存会によって再現され、毎年五月中旬から下旬にかけて赤紫色の穂を実らせています。さて、参加者一行は藤川宿をさらに東へ向かい、脇本陣跡、本陣跡、問屋場跡、高札場跡を見学し市場町の明星院へ。弥次さんによると、伝馬朱印状が発給された当時の藤川宿は規模が小さく早々から加宿村が求められていた。慶安元年（一六四八）明星院はじめ山中郷市場村の六十戸余が藤川宿の東に移転させられ宿場町としての体裁が整えられたという。なお、加宿は豊橋の二川宿でも行われていたそうだ。藤川宿成立のいきさつを聞きながら、一行は松並木から二時間ほどで東棒鼻へゴールしました。

さて、次回はいよいよフィナーレです。今日より涼しくなっていてほしい。弥次さん、喜多さんら一行は、そう願いつつ藤川宿を後にしました。

藤川宿を行く参加者一行

COLUMN & TOPIC

アーティストのTomb

村松和明

芸術家の墓所は、生前の個性が反映されていることがあって興味深い。写真家として知られるマン・レイの墓は、そのことを感じさせる。パリ、モンパルナスにある彼の墓石は一風変わった形である。これは妻ジュリエットが、マン・レイの十年忌を機に、彼の彫刻《平らな卵》をイメージして建てたものだ。楕円形の墓石には MAN RAY 1890-1976 Love Juliet とあり、その上には、"unconcerned but not indifferent"「無頓着、しかし無関心ではなく」と墓碑銘が刻まれている。この言葉も、彼の絵画作品のタイトルを引用したものだが、知性とユーモア、アイロニーをもって、芸術の既成概念を破壊しようとしたダダイスト、マン・レイらしさが伝わってくる。

楕円形の墓石が建てられた五年後、今度はジュリエットの長方形の墓が、その右隣に寄り添うように建てられた。上部には二人の写真、ジュリエットはやさしく微笑み、マン・レイは彼らしく生真面目な表情を見せる。生前の二人の仲むつまじき姿が偲ばれるが、何よりもその下に刻まれたジュリエットの一語が、二人の絆の強さを感じさせる。

"Juliet MAN RAY 1911-1991 TOGETHER AGAIN"「再びいっしょに」

マン・レイとジュリエットの墓　2007年

編集後記 ｜ 連載4回目を迎えた「桃の花咲く隠れ里の物語」は、ようやく漁師が洞穴をくぐり抜ける場面にまで到達しました。彼が桃源の里で時を過ごし、岐路についてふたたび彼の地を目指すまでのお話は、まだまだこれから。この調子ですと、次々回の春号は桃源郷特集になるかもしれません。本号も、展覧会紹介やスタッフの小話など盛り沢山の内容となりました。秋の夜長のひと時に、お読みいただければと思います。（干）

INFORMATION

裏千家11代玄々斎宗室生誕200年記念

茶の湯の文明開化 －茶人玄々斎の生涯と奥殿藩松平家－

9月11日(土)～11月7日(日)

■講演会

10月30日(土)「茶の湯の文明開化」

筒井紘一(財団法人今日庵茶道資料館副館長)

■茶道講座

10月11日(月・祝)「玄々斎の茶道具」

橘倫子(財団法人今日庵茶道資料館学芸員)

※いずれも午後2時から

収蔵品展

民具が語る暮らしのうつりかわり

11月20日(土)～1月16日(日)

■講演会

12月4日(土)「岡崎における民俗文化財の現状と展望」

野本欽也(岡崎むかし館主任専門員)

■学芸員による展示説明会

11月28日(日)、12月18日(土)

※いずれも午後2時から

■学芸員による館外講座

11月26日(金)

※午後2時から

※会場は岡崎市美術館東館2階講座室となります。

■平成22年度　愛知県陶磁資料館出前陶磁講座

10月17日(日)「やきもの文化を語る3　うるおいの器　色・形・文様」

仲野泰裕(愛知県陶磁資料館副館長)

※午後2時から

■やさしいミュージアム講座受講者募集

「浄土への誘い―三河の浄土宗寺院の歴史と美術―」

11月～平成23年3月の毎月第2水曜日　10:30～12:00(全5回)

当館学芸員、天野信治(安城市歴史博物館学芸員)

※11月は第1水曜日に変更します。

「桃源郷の世界」序曲

12月～平成23年3月の毎月第3水曜日　14:00～15:30(全4回)

芳賀徹(当館館長)

※12月は第1木曜日、1月は第2木曜日に変更します。

≪共通≫

■申込方法／往復ハガキに、希望講座名(ハガキ1枚につき1講座の申込)・郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・電話番号を明記の上、10月20日(必着)までに下記へお申し込みください。　※ハガキ1枚につき1人の申込。　※各講座全て参加できる方のみご応募ください。

■申込先／〒444-0002　岡崎市高隆寺町字峠1番地　岡崎中央総合公園内
岡崎市美術博物館「やさしいミュージアム講座」係

おしゃべり、あれこれ。

professionalを目指して

一九九三年、日本サッカー界に大きな変革が訪れた。　Jリーグ(通称)の開幕である。その開幕戦である、ヴェルディ川崎対横浜マリノス戦を中学生の自分は興奮の中テレビに齧り付いて、自分もこの舞台に立てるのではと夢見ていた。

それから十七年、夢は叶うことはなかったが、三〇歳を過ぎた今でもサッカーボールを追い続けている。

そんな運動一筋の人生に転機が訪れたのは、今年の四月。芸術とは無縁の生活を送ってきた自分が美術博物館の施設管理することになったのである。

美術博物館の施設管理とは未知の領域であるが触れるにつれてその奥深さに驚くばかりである。

例えば演出の照明である。指針はあるものの明確な正解はなく、自分の感性に因る部分が大きく、同じものを展示しても同じものに仕上がるとは限らない。これはサッカーにも通ずる所がある。理論に裏付された一瞬の閃き、判断でプレーする、まさにprofessionalである。

舞台は違えども、professionalをめざして日々奮闘の毎日である。(穣)

「生音鑑賞」のススメ　私的プチ文化情報

「趣味は何?」と問われて「音楽鑑賞」と答える人は多い。私もその一人である。ただ私の場合、部屋で珈琲を飲みながらお気に入りのCDを…というのとはちょっと違う。そう、私の趣味は「生音鑑賞」である。

生音鑑賞とは、言うまでもなく、コンサートやライブで音楽を聴くことである。部屋でCDを聴くこととの大きな違いの一つは、身体全体で音を感じることによって得られる高揚感だろう。音とはすなわち空気の振動であるから、耳だけでなく身体全体でその響きを感じることによって、より深く味わうことができるのである。

ちょっとオシャレをして素敵なホールでクラシックに耳を傾けるもよし、ちょっと背伸びをして薄暗いジャズバーで身体を揺らすもよし、時には小さなライブハウスでロックバンドの爆音に身を委ねるもよし。敷居が高いと感じる場所でも、入ってしまえば案外なんとかなるものである。

唯一の問題点といえば、決して安くないチケット代。そうそう頻繁に行けるものではない。…だから私は今日も、部屋で珈琲を飲みながらお気に入りのCDを聴くのである。(中)

表紙図版：羽衣図　玄々斎好　八代中村宗哲作　江戸時代　今日庵蔵

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM

開館時間　午前10時～午後5時(6月～9月は午後6時まで)
※最終の入場は閉館時間の30分前まで
休館日　月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始　※展示替えのため臨時休館する事があります。

［岡崎市美術博物館ニュース／アルカディア］第46号　2010年10月発行
編集・発行　岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002　愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館　http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html　ARCADIA